

Hokkaido, Paris and Poland Ikuko Endo Piano Recital



ごあいさつ

終戦後、私の両親は生後間もない私を抱き、機雷の浮く津軽海峡を渡り、復職のため札幌へ戻りました。北海道の大自然の中で大らかに育つことのできた私は、後にヨーロッパの気候風土の中でも伸びやかに過ごすことができました。私のピアノの音色は、北海道の自然と深く関わっていると言えます。とはいっても東西冷戦中に私が体験した日々は、ショパン自身と重なり、人生の荒波に幾度も命を奪われそうになりました。

こうして、今日、古希を迎える迄ステージに立つことができるのは、周囲の方々のお力添えとお励ましの賜なのです。

「私が聴いたあの音」と言ってくださった伊福部先生の懐かしい北海道神宮祭の旋律。パリでペルルミュテル先生に薰陶を受けたラヴェル。娘として愛しんで下さったステファンスカ先生御夫妻のショパン。そして天国の両親…。皆々様に感謝の祈りが届くよう、このリサイタルに心と魂を込めます。

遠藤郁子

遠藤郁子 Ikuko Endo

「90才の人生で初めて靈感で弾かれたショパンを聴いた（20世紀最後の巨匠グラド・ペルルミュテル）」、「イクコ・エンドウ偉大なるピアノの才能（巨匠アルトゥール・ルビンシュタイン）」、「今までイクコ・エンドウほど感動させられたピアニストはいない（ロンドン・ディリーテレグラフ紙）」「日本人唯一のショパン弾き（ワルシャワ・フィル音楽監督カジミエシュ・コルト）」「50才を過ぎて咲いた花は人の命をも救う（人間国宝・金春信高～松本サリン事件の奇跡に際し）」「天啓の音（文化功労者・畠中良輔）」と世界から絶賛される遠藤郁子の演奏は、「作曲者の魂を伝えるピアニスト」として内外に根強いファンを持つ。

札幌にて3才よりピアニストの母、遠藤道子（ポーランド文化功労勲章、文部省地域功労賞、北海道開発功労賞、北海道文化賞、他受賞多数、日本ショパン協会北海道支部創設者）に音楽の手ほどきを受け、北海道初の東京芸術大学附属高校へ入学後、毎日新聞社主催「日本音楽コンクール」で北海道出身者初の受賞。東京芸術大学に入学後、1年の時に「安宅賞」を受賞し、日本代表として第7回ショパン国際ピアノコンクール（1965ワルシャワ）に出席し特別銀賞受賞、一躍注目を集め、オストロクシキ宮殿でのデビューリサイタルで「偉大で小柄な日本娘」のタイトルで絶賛された。ポーランド国営テレビ・ラジオに録音多数。世界的ショパン奏者ステファンスカ夫妻に見い出され、その内弟子として5年間更なる研鑽を積む。1974年からパリ在住。グラド・ペルルミュテルにラヴェル全作品の指導を受け、フランス国営テレビ・オーディションにて最高位を収め、同局に録音を残す。その間、激賞されたロンドン・デビュー、パリ・デビューの他、北米、旧ソビエト、ハンガリー、ルーマニア、東ドイツで演奏。特にユゴスラビアには毎年招かれ、巨匠アルド・チッコリーニの夏期講習（オフリッド）を受け継ぎ、長年にわたり講師を務めた。その功で、オフリッド25周年功労賞を受賞。帰国後は、東京芸術大学講師、聖カタリナ大学客員教授を務めるかたわら活発な演奏活動を行う。特にCD「ショパン序破急幻」が松本サリン事件で植物人間状態となり眠り続けた女性の意識を覚醒した奇跡は、連日マスコミで大きく報道され、東京サントリーホールでのチャリティコンサートの収益（600余万）が、5,000人のサリン患者のため寄附された。これまで共演したオーケストラは、ワルシャワ・フィル（定期）、クラクフ・フィル（定期）、ハンガリー国立フィル、グルノーブル市立オケ、N響、読響、日フィル、新日フィル、東響、東フィル、都響、札響、京響、大フィルなど多数。また、ショパン国際ピアノコンクールをはじめ多数の音楽コンクールの審査員を務める。NHK教育テレビ・NHKラジオの番組「こころの時代」に幾度も出演し、自らの人生を通じて「こころ」の問題について語っている。CD、著作多数。2000年にはポーランド国家プロジェクト「ショパン全曲演奏」（於東京・上野田奏楽堂、ポーランド大使館・同奏楽堂共催）の演奏に対して、ポーランドのショパン年実行委員長（文化芸術大臣兼務）からショパンのプロンズ像を授与された。

日本ショパン協会理事、NPO法人まづるか北海道（音楽による福祉団体）理事長。